

コミュニケーションの時代の副詞観

〈副詞分類と文法観〉

澤 田 茂 保

A taxonomic view on adverbials and its implication in education

SAWADA, Shigeyasu

金沢大学外国語教育研究センター
言語文化論叢 第14号
2010年3月刊

Foreign Language Institute
Kanazawa University
Studies of Language and Culture
Volume 14
March 2010

コミュニケーションの時代の副詞観

<副詞分類と文法観>

澤 田 茂 保

0. はじめに

学校文法における副詞は、他の文法事項に比較して重要度が低く見られている。その原因は学校文法の中心的な目的が文構造の理解にあるからである。しかし、例えば、副詞表現には情報として伝えられる命題内容に対する話し手の態度や話し手からみた自己の発話についての評価を表す類があるので、話し手と聞き手が存在する場面でのコミュニケーション能力の養成を教育目標の中心におく時代にあっては、副詞についての文法教育上の再評価が必要であると思う。本稿では、学校文法のもととなる伝統文法での副詞観の問題点を指摘して、現在の英語教育にふさわしい副詞観とその扱い方を考察する。第1節では伝統的な副詞観とその由来を概観し、第2節では Quirk et al. (1985)と Biber et al. (1999) とに見られる副詞分類について比較検討する。第3節では、コミュニケーションの時代の文法教育における副詞の位置づけについて論じる。

1. 伝統文法とその副詞観

伝統的な文法論で英語を理解しようとする副詞に困難な問題が発生する。それは伝統文法が品詞論をもとにしているからである。品詞の一つである「副詞」の英語名“adverb”は、ラテン語の *adverbium* からの直訳で、それは *verb* に *ad-* (付加する) という意味に由来する。ヨーロッパ言語の文法では、言語の分析単位は命題としての意味を担った「文」である。命題を構成するには名

詞と動詞が不可欠であり、その二つを言語の主要な品詞とした。その上で、名詞を修飾するものを形容詞、動詞を修飾するものを副詞という具合に派生的に定義したので *adverb* の名がある。しかし、英語においては、副詞が本質的にどのような働きを持ったものか説明が難しい¹。

副詞という品詞は、他の品詞と比べると、一層定義困難な品詞である。しいていえば、名詞でも形容詞でも、また動詞でもない、そして前置詞や接続詞でもない、それらを除いた残りのものをまとめて一つの品詞とし、それを副詞とよんでいるのである。英語では、*not* も副詞なら、*yes* までも副詞である。それが、副詞は品詞分類のゴミタメといわれるゆえんである。

(『言語学大事典』第六巻術語編の副詞の項)

伝統的な英文法の品詞論では、上で述べてあるように、副詞は雑多なものを集めた概念になっていて、体系的な説明が困難となり、これが学習者にまず副詞を分かりにくくしている。

また、伝統文法の影響を受けている日本の学校文法では、まず文構造の理解を文法教育の最初の目的としているので、それが副詞に対する誤ったメッセージを与えることにつながっている。高校生向け文法書では、冒頭で＜文の基本構造＞といった項目でいわゆる「5文型」について説明しているものが多い。5文型論が文法教育の初期に導入されると、副詞的な表現の取り扱いが軽視されてしまう。5文型論が文法教育の主軸であれば、教員は生徒にそれを理解させなければならない。理解できるとは識別できることであるから、識別するために、文の骨格を露わにする操作を教えることになる。それが文の骨格的構造以外の飾りの部分、つまり、副詞部分を不要視することにつながる。しかし、副詞的な表現は飾り部分であるが故に、言語学習が進むにつれて、言葉を豊かにしていく表現類として働く。5文型論の説明で、副詞が「文の構成上不可欠な要素ではない」といった言い方で導入されてしまうと、その偏見からなかなか脱却できない²。

以上、そもそも副詞は分かりにくい概念であること、また、学校文法の文型

論で導入される文法教育では副詞は理論的に軽視されざるを得ない、ことを指摘した。次節では、伝統文法での副詞への考え方を概観してみる。

1.2. 伝統文法での副詞分類

ギリシア・ラテン語の文法論に由来を持つヨーロッパの伝統的な文法論は古典を読むための文法論であり、そこでは言語知識は個々の語をグループ化した品詞というカテゴリーとその配列規則の知識に還元される。品詞(parts of speech)はまさに言葉の部品であるから、言葉を分解することで、その構成要素としての部品を同定・整理して、部品の働き（振る舞い）や部品間の関係を一般化することが伝統文法での品詞論である。

日本人研究者が英文法の総攬として半世紀前に出版された『研究社英文法シリーズ』では、副詞は第 17 巻『副詞・接続詞・間投詞』（以下、八木(1959)）のなかで扱われている。そのうち副詞の記述はわずか 28 ページで、他品詞の記述と比べと突出して少ない。Henry Sweet の New English Grammar に代表される伝統文法やそれに倣った『英文法シリーズ』での副詞分類は、単一副詞語(single word adverb)の分類に限定されている。それは、基本的に品詞論を根底に持っているからである。例えば、前置詞句も機能として「副詞的に」働くが、前置詞句は前置詞という品詞で扱われるのが筋で、節内の働きが副詞的であることから「副詞」論に入れることはない。品詞論を基礎にすれば、副詞の記述は矛盾をはらんでしまう。従って、伝統文法での副詞の取り扱い極めて限定的となり、かつ非一貫性を持っている。

伝統文法の副詞分類は個々の「語」の「ラベル論」として理解される分類方法で、はっきり言えば、副詞への理論が不足している。例えば、それが顕著なのは「副詞が文を修飾する」という説明である。例えば、八木(1959)においても、学校文法でおなじみの(1)のような文をあげて、(a)は動詞 die を修飾し、(b)では「文全体を修飾している」といった説明を与えている。

- (1) a. He did not die happily.
- b. Happily, he did not die.

しかし、「文全体を修飾する」というときの「修飾」は、少なくとも happily が die を「修飾する」意味とは異なる⁴。「修飾する」というのは便利な言葉だが、論理的に考えようとする学習者には、むしろ分かりにくくさせる。

伝統文法の常套用語である「文を修飾する副詞」には検討が必要であり、「語順が比較的自由で、文全体を修飾する要素」としてまとめることは教育的に見て不親切であると思う。とくに「使える」英語を目指す場合には不十分であろう。文法研究では過去 20 年ほどで副詞観が相当程度変わったので、伝統文法のよいところを保持しつつも、新しい視点に立った文法教育の視点が必要である。

2. 新しい副詞分類

本節では、伝統的な副詞観を踏襲しつつも、副詞記述について新しい観点を取り入れている Quirk et al. 1885 (以下、CGEL)と、CGEL に大きな影響を受けながらもコーパス分析を通じて新しい文法記述を試みている Biber et al. 1999 (以下、LGSWE)を比較する。

2.1. CGEL における副詞の分類

CGEL の副詞分類は 478 頁から 653 頁に渡り、他の品詞類と遜色ない程度に詳しく扱われており、また伝統文法とは異なった新しい視点が多く取り入れられている。特に、伝統文法での文修飾の副詞を「語順が比較的自由で、文全体を修飾する要素」といった曖昧な考えはない。CGEL の副詞分類の特徴を簡単にまとめると次のようになる。

- (i) 副詞を語レベルに限定せずに、文中での機能からとらえる。
- (ii) 副詞表現について、文中での構造的な関係を基準に分類する。
- (iii) 包括的な分類を試みているが、複数の分類に入る事例が多数存在する。

以下では、上記の点について述べる。

2.1.1. まず、(i)について。CGEL は修飾関係(modification)を厳密にとらえて、「文全体を修飾する」といった曖昧な表現をしない。そのため、強意(intensification)の働きが二つに分かれるなどの問題点はあるが、形容詞と名詞の関係である「修飾」という言葉を節内での文法関係にある副詞に使用しないことは正しいことである⁵。伝統文法での「文を修飾する副詞」に属する副詞類の働きは厳密には modification ではないからである。

日本の文法教育では用語に誤解を生じさせるところがある。adverb は noun や preposition といった品詞-名と並行的な用語で、「語」のラベルとしての名称である。一方、subject や object は節内での文法関係の名称である。ある要素を文という構造から切り取って、これは subject である、ということは意味がない。語のラベルとしての名称を「○詞」と呼ぶのはいいとしても、subject や object を「○語」と呼ぶのは誤解を生みやすい。「語」ではないからだ。CGEL では、語のカテゴリー名としての品詞と節内の文法関係を峻別して、adverb を前者としてのみ使用し、後者を adverbials(以下、副詞類)と呼ぶ。副詞類は節内で何らかの文法関係を結び、意味的に認可される表現全般の名称で、品詞とは異なった概念である⁶。

CGEL の分類を概略すると表 1 のようになる。CGEL は、伝統文法のように語レベルで

とらず、副詞類を広く取り扱って、統語的な形態に依存しない分類を行っている。この点で、伝統文法の理解で CGEL を読もうとす

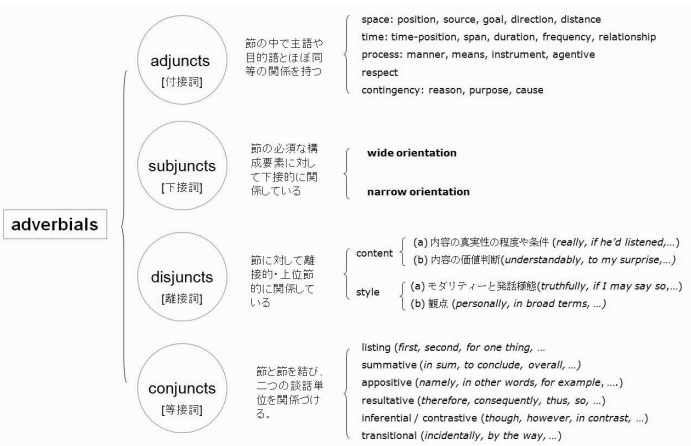


表1.

ると、かえって混乱するかも知れない。

2.1.2. 次に、(ii)について。CGEL の副詞分類は、基本的に、節内での働きに基づいた「構造論的な」分類であるといえる。これが CGEL の強みといえるが、見方を変えると弱点でもある。

CGEL は、表 1 にあるように、副詞類を大きく四つに分ける。まず、主語や目的語のような節内の必須構成要素とほとんど同じ重要性を持つものを adjuncts (付接表現) とする。この構造関係を模式的に表せば、図 1 のようになるだろう。三角部は命題内容を表し、その下の四角形はそれぞれ節内の必須構成要素である。意味的には、文が伝える命題内容の真偽に関わる要素である。付接表現は真偽性に関わるという前提から、例えば、焦点を受ける、疑問詞で抽出できる、といった統語操作によって区別できる⁷。

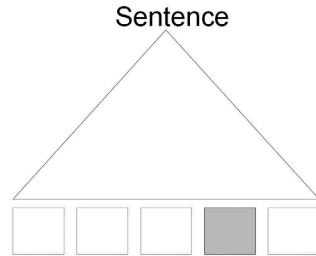


図 1.

CGEL では、空間や時間の表現類は付接表現なので節内の必須構成要素と認識されている。5 文型論に慣れた人は意外に思うかも知れない。だが、時や場所は意味論的に出来事の理解に必然的存在で、文脈上では必ず存在している。ないと感じるのは、文法書の例文で文法を理解するからである。同様に、理由や目的等は、文脈に現れていなくても、出来事に付随しているので、contingency と呼ばれて、付接表現となる。

次に、主語や目的語のような節内の必須構成要素よりも「独立性が低く」、節内の他の何らかの要素に従属していると見なされるものを subjuncts (下接表現) と分類する。下接表現は区分がもっとも多岐にわたっているものなので、表 1 では簡略してあ

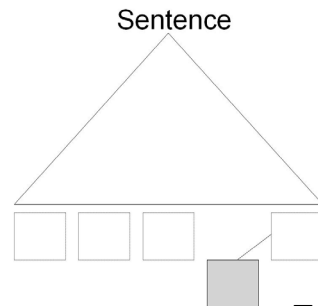


図 2.

る。模式的に表すと、図2のようになるだろう。意味的には、四角部の構成要素に対して、限定を加えたり、強めたりする働きを持つ要素である。CGELでは、命題内容全体に対しても下接表現を認めており、その場合には必然的に次の副詞類と曖昧性が生じる。

三番目に、節の必須構成要素に比較して、上位の意味要素として働いている、とくに節全体に領域を構成する点で、上位付加的であるとして、disjuncts（離接表現）という類を設けている⁸。模式的に表すと図3のようになる。これは、意味的には、三角部で表される命題内容に対して、話し手が付け加える評価や態度を表す場合と話し手の発話の仕方についてのコメントを表す場合がある。また、図3では、文頭にあるが、節内の中間に位置して、節内の構成要素に直接的に上位付加する離接表現もあるので注意がいる。

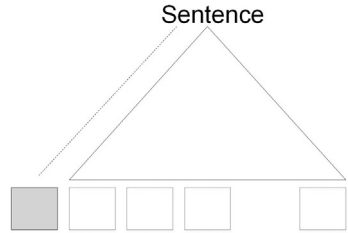


図3.

CGELの区分上の問題は、構造に根拠をおく区分の論理的必然として、図4のような場合に、どちらにつくか判定は曖昧にならざるを得ない。文頭や主語の直後に現れる要素は、主語に下接しているのか、文全体に離接しているのか、意味的に判定するしかなく、構造上に区分の根拠を求めることは困難である。これについては、2.1.3で再度取り上げる。

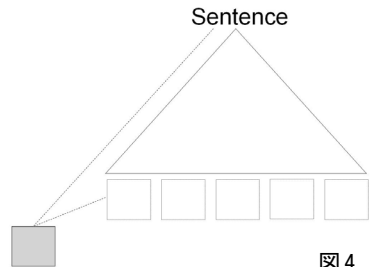


図4.

四番目に、文と文をつなぐ働きがあるものを conjuncts（等接表現）としている。意味的には、文と文の関係を談話上の流れのマーカースとして働きをする。模式的に表すと、図5のようになるだろう。

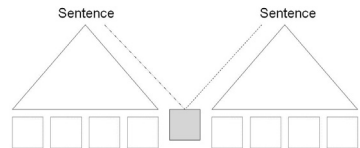


図5.

等接表現について CGEL には定義的な記述はないが、出現の場所が限定的であり、他の三つに比べて分かりやすいグループである。

以上、CGEL の副詞分類を概説したが、分類に構造的な視点を持ち込んで伝統文法の副詞観とは大きく異なる。しかし、構造的な分類と機能的な分類とが若干混在しており、それが後で触れる曖昧性の元になっている。しかし、節内の命題的要素を付接表現として区別したのは副詞をわかりやすくしている。

2.1.3. (iii)について。CGEL は、comprehensive と自称するくらいで、副詞の働きに内省的な深い考察を与えて、包括的・網羅的に分類している。伝統文法の記述には全く存在しない対比や対立を明らかにして、言語学的に見れば大変興味深い洞察を含んでいる。しかしながら、外国語学習者への有用性という点から見た場合、子細に渡りすぎて、また、CGEL でもしばしば言及されているように、対立は微妙なものも多い。例えば、X-Y-Z と三つに分類されていても、実際は三者の違いは等しくなく、むしろ A-A'-B といったように、Y は X の一種（あるいは亜種）であり、区別の観点を変えると消えてしまう、といった場合がある。前節で述べたように、とくに議論の余地があるのは下接表現の区分立てと離接表現との関係である。以下では、とくに問題となる分類について論じる。

2.2. 下接表現
の下位分類

表 1 では、下接表現の下に wide orientation と narrow orientation の区分のみをあげたが、実際は表 2 のように、この二つはさ

wide orientation	view point			Architecturally, it's a magnificent conception
	courtesy			He <i>kindly</i> offered me a ride.
narrow orientation	item	subject orientation	general	<i>Resentfully</i> , the workers have stood by their leaders.
			volitional	She <i>refrained deliberately</i> from joining the party.
		verb phrase		I would <i>rather</i> go.
		predication	time relationship	Have you seen him <i>yet</i> ?
			time frequency	He <i>never</i> comes to see me.
	emphasizers			Joan will <i>certainly</i> object.
	intensifiers	amplifiers	maximizers	He has <i>completely</i> ignored my request.
			boosters	They like her <i>very much</i> .
		downtoners	approximators	I <i>almost</i> resigned.
			compromisers	I <i>kind of</i> like him.
			diminishers	It was <i>merely</i> a matter of finance.
			minimizers	She <i>scarcely</i> knows him.
	focusing	restrictive	exclusives	I was <i>simply</i> taking my dog for a walk.
			particularizers	He favors <i>particularly</i> the young women.
		additive		<i>Even</i> some of her friends criticized her.

表2. CGELのsubjunctsの下位分類

らに細かく下位分類されている。以下では、表2の下位分類の有効性と問題点を論じる。

2.2.1. Wide orientation の分類について

CGEL では、(2)のような-ly 副詞を view point-下接表現と分類して、if we consider what we are saying from an [adjective] point of view とパラフレーズできる、という。

- (2) a. *Architecturally*, it is a magnificent conception.
 b. *Geographically, ethnically and linguistically*, these islands are closer to the mainland than to their neighboring islands.

「自分がいま発話していることを、〇〇の観点から見ると....」というのは、明らかに節全体をスコープに置いているので wide orientation と名付けるが、分類上は下接的とする。その理由は、これらが節内の個別的な要素に関係つけられるから、であるという。例えば、(2a)では、it is an architecturally magnificent conception のように、magnificent に結びついているから、ということに根拠をおいている。

しかしながら、この違いは、CGEL でも述べられているが、同じ語が現れると微妙になってしまう。次例を見よう。

- (3) a. Technically, our task is to recycle the waste products.
 b. Technically, recycling the waste products will be easy.

(3a)の technically を命題内容の真偽性に関わっていると解釈すれば、命題全体をスコープに入れていることになるので content-離接表現である。その場合は、「技術」という部分に限定した範囲での真偽性の度合いについて語っている。「技術分野では...ということになる」といった意味になるだろう。一方、(3b)の technically を、will be technically easy と同じ意味でとらえて、easy の判

断に関わっていると解釈すれば、easy に下接的に結びついていると考えられるので view point-下接表現になる。つまり、本来は technically easy の語順であるが前置されたと考える場合である。

この区別は不要であるか、すくなくとも誤解を生みやすい。CGEL の分類では、view point-下接表現に入るものは離接的にならざるを得ない。なぜなら、「○○の観点から見ると…」という部分の次に来る命題は明らかに何らかの判断を伴う文である。その判断に対応する語や表現が必ずどこかに存在して、意味的にはそれに下接していると思なざるを得ないからである。しかし、働き上は、話し手の限定であるから disjunctive 的なものとされてしまう。従って、働き自身に subjunct 的な要素を持った disjunct なのである。この点で、一見すると、(3a)には直接的に下接する要素がないように見える。しかし、この場合は“A is B”という判断自体に下接している、と言うべきで、対応する語が存在しない。

wide orientation のもう一つの類の courtesy 下接表現は、個別的に扱う方がよい。CGEL の分類は個別的な現象をより一般的な形で取り上げるので、全体的に包括的ではあるが、これを下位類として設定するよりも、個別的な現象としてあげておく方が、少なくとも外国語学習者にとっては理解しやすいと言えるだろう。

2.2.2. Narrow orientation

次に、item-下接表現について。節内での働きを持ちながら同時に動詞句内でも機能している verb-phrase-下接詞の例として、CGEL は(4)の斜字体の語をあげている。(4a)は V 要素の modality、つまり、主語の能力を表す部分(can address に相当)に下接して、その程度を表す、という主張だが、これは *emphasizer* に近い。また、その他の verb-phrase-下接表現は熟語の断片として扱うのが妥当であろう。

- (4) a. Freda is *really* able to address the meeting.
- b. I would *rather* go.

- c. I had *better* see a doctor.
- d. He made *up* the rest of the story.

そして、predication-下接表現の time に関する語(yet, already, still, just など)は、動詞に下接していることに説得力はあるが、意味的な振る舞いには固有なものがあり、下接類が消えてしまえば相関語的である。

問題は、subject orientation の下接表現類が必要かどうかであろう。CGELでは、(5)のような例を挙げる。(5a)は manner の読み(「カジュアルなやり方で...」)であるが、(5b)は Leslie was casual, off-hand, when he greeted the stranger の読みで、主語について語る副詞だという。それ故、(5b)の casually を subject-orientation である、としている。

- (5) a. Leslie greeted the stranger *casually*.
- b. *Casually* Leslie greeted the stranger.

また、(6a)は manner の読み(「苦々しい口調で」)の読みであり、(6b)は動詞の程度を強める intensifier booster の読み(「苦々しい程に後悔して...」)の読みであるが、(6c)は、He was bitter when he buried his children の読みである、という。

- (6) a. He spoke *bitterly* about the treatment he received.
- b. He *bitterly* regretted their departure.
- c. *Bitterly* he buried his children.

「主語について語る」副詞というのは魅力的な類ではあるが、manner の一種であると思われる。動作をするときの様子に casual な雰囲気、あるいは bitter な雰囲気が漂っていたことであって、主語について casual である、bitter である、と判断されるように思うのは、casual や bitter が動作の様態と人の性格・気持ちと分けがたい意味を持っているからである。

subject orientation の下接表現は manner と亜種的であるが、一方で、文頭に立つときに多いことから、命題内容についての話し手の価値判断を表す離接表現との類似性も指摘できる。例えば、CGEL は次の副詞を content 離接表現に分類する。

- (7) a. Rightly, Mrs Jensen consulted her lawyer.
- b. Foolishly, John returned the money

ジャンセン夫人やジョンがとった行動が right であるとか foolish であるとか話し手が判断している文であるから、命題内容についての話し手の価値判断を表すので、上位的に付加されているとされる。しかし、一方で、Mrs Jensen was right とか、John was foolish と主語についても判断している、とも言えるので、その方向から考えれば明らかに subject orientation の下接表現となる。

subject orientation の下接表現のもう一つの類である accidentally, purportedly 等は manner の中に入れるか、あるいは付接表現の一種である。なぜなら、これらは CGEL 自身の adjunct の定義をパスするからである。

以上で、wide orientation-下接表現及び narrow orientation-下接表現のうちの item-下接表現の問題点をあげた。他に下接表現として分類されているのは、emphasizers, intensifiers, focusing-下接表現である。intensifiers は、節内にある段階的な意味を持つ語・語句と反応して、その程度に変化を与える働きがあり、focusing は節内の特定の語や句に選択的に焦点を当てる働きがあるので、「下接」という語にふさわしいグループであろう。以下では、emphasizers について議論を限定する。

2.2.3. **emphasizer** について

emphasizer (以下、強調詞)は、CGEL によれば、節の真理値を強める効果(reinforcing effect)を持っており、意味的にはモダリティである、という¹⁰。強める効果というのは、節での構成素の「程度」(degree)を強めるのではなく、「力」(force)を強める、という。ここでの力は「発話の断定力」とも言える

だろう。しかし、一義的には程度を強めることがないけれども、例えば、動詞に程度を感じる場合、程度を強める読み、すなわち intensifier(以下、強意詞)の読みを持つ傾向にあるのは自然である。例えば、(8a)は it is really possible that he has....の読みで、may を強めている。一方、(8b)は it is possible that it is really true that he has の読みで、have 以下の部分を強めている。(8a)と(8b)には蓋然性や真理性（つまり、モダリティー）を強めているので、純粹な強調詞の読みが可能だが、(8c)は多義的である。一つは強調詞の読みで「本当に」といった語感で、もう一つは強意詞の読みで「ひどく」といった語感だろう。

- (8) a. He *really* may have injured innocent people.
 b. He may *really* have injured innocent people.
 c. He may have *really* injured innocent people.

なぜなら、injure には程度を感じるからである。段階を感じる語であれば強調詞と強意詞は限りなく近くなる。一方は発話の力、他方は程度というふうに区別はできるけれども、「高める」点では似ている。

一方、強調詞と content-離接表現との関係にも同様な連続性がある。強調詞が文全体に「下接する」という場合と content-離接表現が文全体に「上位に付加する」(=離接する)のは紙一重で、わかりにくさを助長している。例えば、CGEL では、(9)-(10)の(a)は強調詞で、(b)は content- 離接表現としている。

- (9) a. He will certainly win the race.
 b. Certainly, he will win the race.
 (10) a. I really like him.
 b. Really, the public does not have much choice in the matter.

(a)では、副詞は命題内容についての真理値の度合いを強めている。(9a)は it is certain that he will win the race とほぼパラフレーズされ、(10a)は、it is really

true that I like him とパラフレーズされるであろう。(a)の文は、話し言葉のモードであれ、書き言葉のモードであれ、その強めている意味は＜脱場面的＞である。

一方、(b)は話し言葉のモードであれば、副詞は話し手が今現時点で言明する命題内容についての確信の度合いについて関わっている、つまり、(9b)は、I say with certainty that...の読みであり、(10b)は I say with a certain reality that... くらいの読みである。(a)の下接詞は脱場面的な働きをするが、(b)の離接表現は、話し手と聞き手が存在する＜場面-内的＞である。

換言すれば、(a)と(b)の違いはモダリティーの区別に対応するもので、構造的な関係と直接結びつくものではない。一般論として、(b)の意味の場合は、全体に対する話し手の態度に関わるので、文頭に立つ可能性が非常に高い。他方、(a)の場合は、文の命題内容をスコープに置いているので、構造上節の中心的な位置であるオペレーターの位置に現れる。(a)と(b)はいずれも命題内容に対する話し手あるいは書き手の断定の度合いについてのコメントである。決して真理値に影響を与えないが、違いは脱場面的であるか、場面内的であるかにあるのだと思う。話し言葉のモードのように文脈があれば、その区別は付きやすいが、書き言葉のモードでは区別が曖昧にならざるを得ない。

以上、強調詞について、強意詞と content-離接表現との共通性を指摘した。CGEL のように強調詞を離接的な表現類と区別することは理論的に可能であるが、区別すると逆に類似性が隠れてしまうこともある。簡便に、強意の副詞類か、離接的な表現類かに包摂されるほうがよいであろう¹¹。

2.3. CGEL での副詞の位置の議論

さて、これまで CGEL を批判的に検討してきたが、CGEL では他に見られない有意義な考察がある。それは副詞の出現位置についての議論である。伝統文法では、例えば、頻度を表す副詞はふつう「一般動詞の前、be 動詞や助動詞の後」に現れる、といった説明があるが、多くの副詞類の出現位置は「比較的自由である」といった説明になっている。しかしながら、実際は、主語や目的語のような厳格な位置はないが、どの位置に現れればどのように解釈される可

能性が高くなるか、といった傾向性がある。

CGEL での副詞出現位置を図示すると図 6 のようになる。

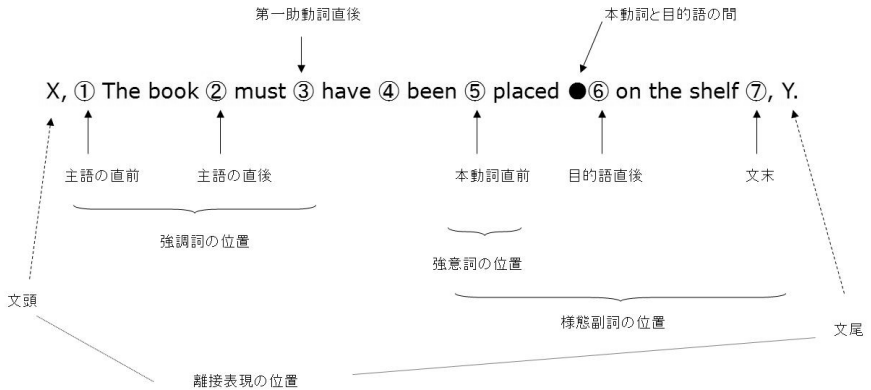


図6. 副詞の出現可能位置

CGEL では文法記述における「頻度」という概念が不十分で、起こりうる位置をすべて列挙しており、ある副詞類にとって、どれが主要な位置なのかわかりにくい。副詞の種類とその働きから生起位置には標準的な位置とそうでない位置がある。例えば、強調詞の位置は、文全体に下接するとされるので、文全体に影響を及ぼすことができる位置、つまり第一助動詞(オペレーター)の直後の位置、③がもっとも標準的である。そこからはずれるほど不自然になる¹²。一方、強意詞は強める要素の直前におくのが原則である。英語では他動詞と目的語の間には副詞表現は生起しない。従って、動詞を強める場合、標準的な生起位置は⑤となる。

動詞形が単純形であるとき、⑤で強調詞と強意詞の標準的な出現位置は重なり、読みが多義的になる。強意と強調の両義的である *really* と強意の読みしかない *completely* で比較しよう。

- (11) a. He completely delighted the audience.
b. He really delighted the audience.

(11a)の completely は delighted の程度を強めているが、(11b)は多義的で、delighted の程度を強める強意詞の読み（例えば、「実にすごく...」といった語感）と he delighted the audience という命題の事実性を強める強調詞の読み（例えば、「本当に...」といった語感）とがある。

(11)では標準的な位置が重なっていたが、(12)のように動詞部分を複合化すると、その差が出てくる。

- (12) a. *He completely had delighted the audience.
b. He really had delighted the audience.

②の位置にある(12a)では、強意詞の標準的な位置から相当離れるので、強意詞の読みしかない completely は極めて坐りが悪い。一方、(12b)では、強意詞の読みは弱まり really の強調詞の読みがさらに強まる。

出現位置は否定語の存在でも影響を受ける。強調詞は命題内容についての確信の度合いを表すので、否定の領域に入れないが、強意詞は否定語の領域下にあると程度の方向性が否定されて、部分否定の解釈を生む。

- (13) a. He didn't completely delight the audience.
b. He didn't really delight the audience.
(14) a. *He completely didn't delight the audience.
b. He really didn't delight the audience.

副詞が否定の領域に入る(13)では、共に強意詞の読みしかない。そして、いずれも部分否定となる。一方、(14b)では、really は強調詞の解釈で、「喜ばなかった」ことの事実性を強調するが、(14a)では、強調詞の読みはない completely が②の位置になり、(12a)と同程度に容認できない、ということになる¹³。

付接表現の一つである様態(manner)副詞と強意詞も⑤の位置では重なる。様態副詞は動詞様態を描写するので動詞周辺に置かれる傾向が強いし、また動詞周辺に現れれば様態的に解釈される傾向にある。英語では動詞直後に副詞は生

起しないので、様態副詞は、後では⑥と⑦が標準的な位置で、前では⑤となる。強意詞は強める語の直前が無標の位置なので、動詞の後ろに来ることはない。動詞を強意する場合、⑤が標準的位置である。従って、強意詞の読みしかない *greatly* は *to greatly appreciate it* のようになるが、*to appreciate it greatly* とはならない。だが、様態と強意の両用に解釈される語では、微妙な聞こえ方の差を生むという。

CGEL の観察によると、(a)は様態的で、(b)は強意的である、という。(15a)は「あらゆる点において否定した」といった *deny* の様態に関わった語感であり、(b)の方は「強く否定した」といった語感であるという¹⁴。

- (15) a. He denied it *completely*.
- b. He *completely* denied it.
- (16) a. They attacked him *violently*.
- b. They *violently* attacked him.

さらに、CGEL によると、(16a)では、*attack* の様態に関わり、物理的な暴力を連想するが、(16b)では *attack* の程度に関わり、言葉の暴力であるように感じるという。同様に考えれば、例えば、*injure him slightly* であれば、様態的な意味を帯びるから *injure* の仕方に関するが、*slightly injure him* であれば、強意の標準的な位置なので *injure* の程度に関わる、といった説明ができるかも知れない。このような違いは段階的で、大変微妙であろうが、副詞の出現位置と意味解釈の相関性において興味深い指摘であると思う。

他方、語の意味に動きが含まれない *detest* と程度が含まれない *dissect* を比較すると容認性の対比が生まれる。(17a)は容認性が落ちるが、(17b)のように強意詞としての解釈される位置にきて、「激しく」といった語感になる。

- (17) a. ? They detested him *violently*.
- b. They *violently* detested him.
- (18) a. He dissected the animal *completely*.

b.? He *completely* dissected the animal.

一方、dissect には程度がないので、(18b)は容認性が低く、(18a)であれば、dissect の動きの仕方に関わり、「非常に細かく」といった語感で解釈される。

以上は、単一語の副詞の場合であるが、副詞類は一般に生起位置と読みに相関性がある。付接表現でも、生起する位置によって意味がそれぞれ異なってくるので、副詞類の位置と読みは関係が深く、決して自由ではない。例えば、(19a)の with a knife は道具を表す動詞区内の副詞表現として解釈されるが、同様の句が前にある場合、単純な道具句ではなくて、「そういうナイフを使っていたら...」といった条件のような意味を帯びる。それ故に、文頭にくるほうが自然である。

- (19) a. He chopped the parsley *with a knife*.
 b. *With a knife like that*, you couldn't cut through this salami.

以上、副詞表現の出現位置は節内の必須構成要素のように固定していないが、典型的・標準的な位置が存在し、それから離れていけばその読みが弱まり、別の読みが強くなる、といった傾向性を持つことを見た。

CGEL は構造的な観点から分類を試みて四つのカテゴリーに分けるが、とくに下接表現と離接表現の下位分類で、交差する事例がある。その原因は、もともと副詞の働きを構造的な区分から分けておきながら、意味的な基準を持ち込まざるを得なくなったところにある。次節では、構造的な部分を単純化してその欠陥を消している LGSWE の分類を見てみる。

2.4. LGSWE における副詞の分類

本節では、CGEL と対比的に、コーパスの分析による文法記述を行っている LGSWE をみたいと思う。LGSWE の特徴をまとめると次のようになろう。

- (i) 内省に基づいた文法記述ではなく、コーパスの分析に基礎をおいた

言語の使用実態の記述を目指している。

- (ii) 意味と形式の対応に加えて、表現の適切な使用という概念を導入している。
- (iii) 副詞分類の些細な事項に入らずに、文の機能的構成を反映した三つの分類にとどめている。

(i)と(ii)は不即不離の関係にある。CGEL は形式と意味の対応という言語学の中心的な課題から逸れずに文法記述しようとし、多くの観察は著者自身の言語直感に基づいている。そして、内省的に見て「こういう使い方が可能である」という議論はあるが、「こういうときにはこういうふうを使う」といった視点は希薄である。一方、LGSWE では、データベースの分析に基づいて言語使用の実態を記述するので、結果的に、文法を意味と形式の対応ではなく、意味-形式-使用という三つの関係で記述することにつながっている。「適切な使用 (appropriate use)」の概念の導入は、文法記述の変化として特筆されるべきである。適切な使用という概念を具体的に文法記述に持ち込めるようになったのは、大規模なコーパスデータが分析可能となったからである¹⁵⁾。

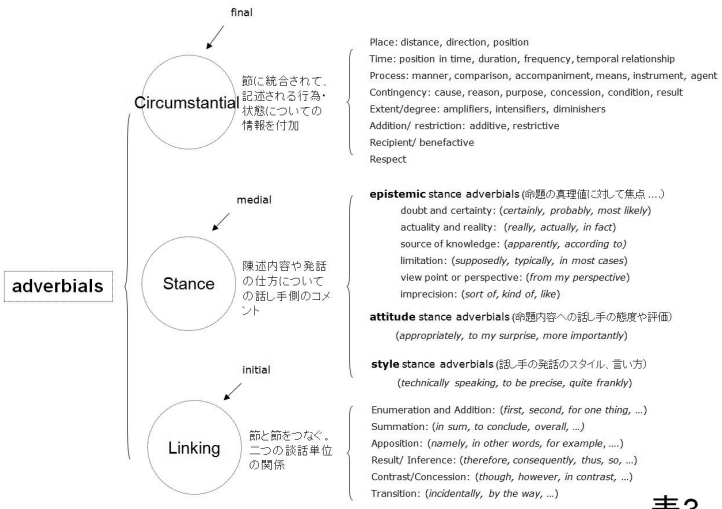


表3.

LGSWE では、CGEL に比べて副詞分類が極めて単純化されている。LGSWE の副詞分類は表 3 の通りである。まず、circumstantial adverbials（周辺副詞類）は、節で記述される動きや状態について付け加わるあらゆる要素を含んでおり、もっとも多岐にわたる。LGSWE では、how, how much, to what extent, why, when, where などの疑問に答える要素、とされている。しかし、CGEL に見られる操作的な定義をとらない。例えば、also などは疑問文で聞けるような意味ではない。それ故に、CGEL では付接表現ではなく下接表現に分類したが、LGSWE では、also を周辺副詞類の addition/restriction に分類する。このような点を CGEL の構造的な分類に厳密性を感じる人は批判するかもしれない。だが、LGSWE の意図は、コーパスから見た使用域の特徴を見いだすことにあり、分類の方向性が異なるのである。

おそらく、LGSWE の著者達が副詞分類をするとき、stance adverbials（スタンス副詞類）に分類される副詞類を最初の基準にしたのであろうと思う。スタンス副詞類は LGSWE が stance とよぶ意味論上の概念が副詞表現として具現された類である。話し手や書き手が何かを発話したり、書いたりしたその場面では、その情報の中心である命題内容の伝達に重ねて、話し手や書き手の感情、態度、価値判断や評価がその中に同時に組み込まれている。stance とは、LGSWE によれば、そういったものの言語手段の総称である。これは従来の意味論では modality 論として論じられてきた分野である。LGSWE の分類は、誤解を恐れずに言えば、広義の「文」から談話のつながりを表す Linking adverbials（結合副詞類）として分離できるものをまず抜き取り、次に、モダリティーに対応する要素をスタンス副詞類として除いてしまう。そして、残ったものをすべて周辺副詞類と分類した、と考えられる。このような分類の方向性であれば、操作的な定義の厳密性から批判することは妥当ではない。つまり、CGEL は付接表現のカテゴリー分けが出発点で、LGSWE ではモダリティー表現のカテゴリー分けが出发点なので、周辺副詞類のカテゴリー分けを厳密ではないと非難はできない、ということである。

2.5. CGEL と LGSWE の対応

CGEL と LGSWE の対応関係を概略すると表 4 のようになる。

CGEL の
 等接表現は
 内部の分類
 数に若干の
 ずれはある
 が、LGSWE
 の結合副詞
 類にそのま
 ま対応する。
 また、付接表
 現のすべて
 は周辺副詞

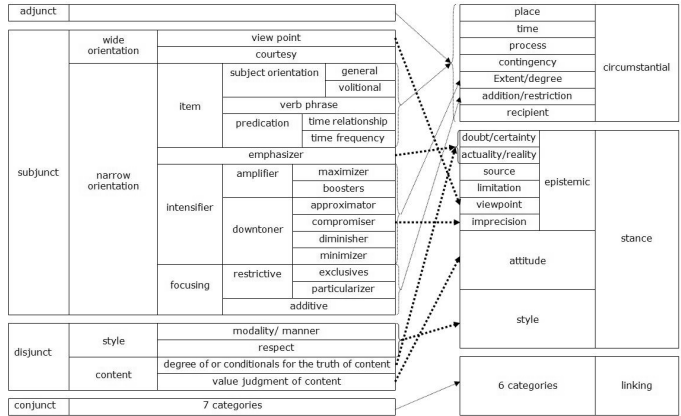


表 4. CGEL から LGSWE への対応関係

類に分類される。CGEL では付接表現は操作的に分類して、結果的に種類が限定的になる。一方、LGSWE では、スタンス副詞類からの消去法で分類するので、節内での意味で何らかの働きをしていれば、circumstantial な要素として見なされてしまう。その観点からいけば、circumstantial な要素はたしかに雑多なものが混ざっているであろうが、その内部の子細を区別することは外国語学習者にとってあまり意味のあることには思えない。

表 4 の太い点線は LGSWE でスタンス副詞類に、CGEL のどのような副詞が対応しているかを示している。まず、style-離接表現は、話し手の自己の話し方へのコメントを表すので、スタンス副詞類の style を表す類として包摂される。そして、content-離接表現の内、命題内容の話し手の価値判断を表す類(fortunately, to my surprise など)は、attitude を表す類に分類されている。これも包摂される。ところが、content-離接表現のうち命題に真理値に関わる類(definitely, obviously, allegedly など)は、下接表現の強意詞と一緒に、スタンス副詞類の epistemic の類に入れてある。これは、2.2.3 で述べた曖昧性を消してしまうので分かりやすい。また、2.2.1 で述べたように、content-離接表

現と類似する view-point 下接表現は、スタンス副詞類の epistemic の類に入る。

興味深いのは、CGEL で compromiser に分類されている下接表現(kind of, sort of など)が、LGSWE では epistemic の imprecision にほぼ対応することである¹⁶。LGSWE の imprecision は、聞き手に対して話し手の確信の度合いを曖昧にする働きとして理解されているが、CGEL では動詞の適切性の強さについて弱める働きと理解されている。この立ち位置の違いは、LGSWE では、話し手と聞き手が存在するコミュニケーションの「場面」を重要視して会話上の効果に重きを置いているが、CGEL では言語を場面から切り離し意味と形式の対応から見ていて、CGEL が脱文脈的であることを示しているといえるだろう。この点で、コミュニケーションの能力養成を教育目標におく場合は LGSWE の分類が参考になる、といえる。

LGSWE では、CGEL の構造的な基準に従った細かな区分が、言葉を場面内的にとらえた機能的な基準により簡略化されている。LGSWE の三分類を模式的に表すと

図7のよう
になるだろ
う。広義の
「文」は、
テキスト上
の文脈に対
応する
Linking の
部分と、話
し手（と聞
き手）が存
在する場面

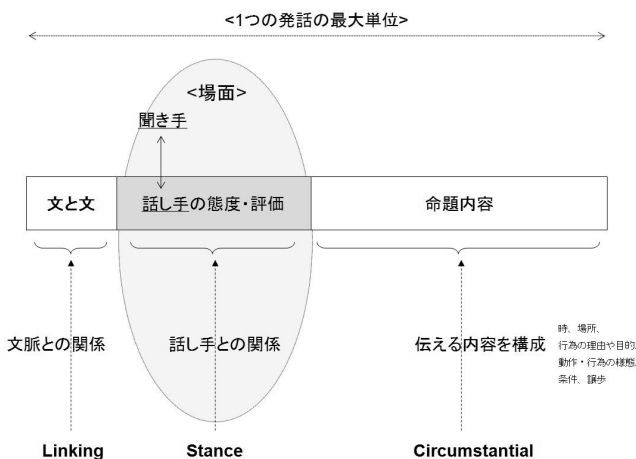


図7. LGSWEの副詞類の配置のイメージ

に関連つけられる Stance の部分と、それを除いた従来の命題的な部分に関する Circumstantial に分けられる。この三つの部分から文が成り立つと考えるわけだが、これは従来の伝統文法の単位としての「文」とは異なるので、一つ

のメッセージ単位の最大値といえるかも知れない¹⁷。発話・メッセージの最大単位を、三つの機能上のコンポーネントからなると考えて、副詞類の働きをその上に位置づけてれば、学習者にとってより分かりやすい副詞教育につながると思う。

CGEL は、2.3 で見たように、副詞の出現位置を細かく分類している。一方、LGSWE ではわずか三つ(initial, medial, final)を区別し、結合副詞類は initial に、スタンス副詞類は medial に、周辺副詞類は final に起こりやすい傾向がある、と述べているだけである。コーパス分析で見られる傾向性のみを指摘して、子細な区別はしない。三つの位置は確かに英語の微妙なニュアンスの理解を目標とする場合は少なすぎるかも知れない。だが、自分の伝えたい内容をとにかく表現するといったレベルでは、三つに単純化した方が位置と働きが明快でわかりやすい。

3. LGSWE の三分類と副詞の位置づけについて

冒頭で、5 文型論で文法教育を始めると副詞の軽視につながる、と書いた。その点をすこし敷衍したい。I bought a book という文は 5 文型論では SVO である。She bought a grammar book last night とあれば、時間表現 last night を削除することで、これが SVO であると教える、ということになる。SV や SVC と SVO との区別で、S/O/C が V に対する項（広義の complement）である関係を発見させるために、時間や場所の副詞表現を「文の必須構成要素ではない」として消去する方向で教えがちになる。

では、時間や場所を表す表現は文の必須の構成要素ではないのだろうか？ S や O に比べて、副詞は二次的な存在なのだろうか？例えば、”The store opens” という文が「現実の場面で」発話された仮定しよう。定冠詞によって、その店は話し手と聞き手で特定される店である。場所も時間もなく、ある事態が起こることはあり得ないから、その場面内では、その店が開店する時間が必然的に関与するし、また、その店の存在する場所も共有されるはずだ。つまり、この文に場所や時間の表現が現れていないのは、現実の場面での事態理解の中に「常

に入っている」からである。典型的な副詞表現である場所や時間の表現は、二次的な存在ではなく、実際の場面での発話として位置づけると必然的な存在なのである。

このことは CGEL の付接表現や LGSWE の周辺副詞類の中に分類されるものの共通の特徴で、場所や時間の表現に限らない。例えば、人がある動作を起こせば、その中に「意図・目的」が含まれたり、「道具」が含まれるのは、事態認識の中で当然のこととして了解されている。また、買い物の実際の場面で、客が店員に対して、I'll take it といえ、**「その値段なら...」**といった条件が隠れている。また、話し手が、I did it と発話すれば、聞き手は発話の背後に「理由」が隠れているとふつう理解する。副詞表現は、実際の「場面」に位置づけて考えると、自動的に理解される要素であり、「必要不可欠な要素ではない」どころか、事態の理解に必要な不可欠な要素である。主語や目的語など文構造に必須とみなされる要素は現れていないと「欠落感」ある。しかし、副詞表現の多くは現れていなくても「欠落感」がない。それ故に不要であるという結論にはならない。むしろ、欠落感がないことはどこかで存在している証左なのである。

5 文型論は、動詞の分類論としては有効であると思う。だが、それによって言葉の仕組みの基本を理解させるにはできない。それは動詞分類論を文型論として誤解して文法教育を始める限り、6 文型でも、10 文型でも同じである。文法教育でもっとも大切なことは、言葉を文脈に置いて理解させることである。それ故、文を文脈に置いて考えさせるためのフレームが不可欠である。ここでの「文脈」とは書かれた言葉の文脈ばかりではなく、話し手と聞き手がコミュニケーションをおこなっている「場面」も入る。その意味での文脈というものに置いて言葉を理解すれば、副詞表現が様々な働きをしていることがわかり、文法への認識も深まる。副詞教育に限らないが、従来の伝統文法による文法教育には、場面に置いて考えさせるといった視点が欠落しており、文脈から切り離された形式と意味の対応の教育となっていた。そのため、実際に使えない知識で終わっていたのである。例えば、学校文法で不定詞の教え方で考えてみよう。不定詞を教えるときに、不定詞の用法には「○○用法」と「△△用法」がある、といった説明は文脈から切り離された文法知識のための教育であ

る。なぜ英語の文法で副詞的用法というものを立てて、その中に「目的を表す」、「感情の原因を表す」、「判断の理由をあらわす」といった区別をおこなっているか、という本質的な説明が抜けている。文を文脈に位置づけて理解させる文法教育をおこなっていないので、そういった本質的な議論ができないのである。不定詞をその形式で理解しているので、日本人学習者は、英語を書くときに何となく不定詞を多用して、例えば、I sometimes feel hard to tell my feelings などと書いても、それは不自然だと思わない。結局、こういった学習者のアウトプットに触れるたびに、文脈から切り離された文法知識は、結局は英語を実際に使うときに生きない、といった反省につながる。だが、このことで文法教育がいらない、とするのは早計で、問題があるのは文法教育のやり方である。

文構造の理解をもし LGSWE のような機能的な三分類に根拠において、文の内容を伝える部分と、話し手の気持ちを伝える部分、そして、文と文をつなぐ部分という大きな図式でとらえて、文の理解の際に文脈に置いて考えるようにすれば、おそらく、不定詞の副詞的用法の区分立ての理由も理解されるであろう。また、実際に発話場面で有用な表現類として、スタンス副詞類を文法教育で導入し、働きの理解とその演習をおこなえば、命令文や疑問文を作れるが、相手を前にして言葉を使えないといった状況を少しでも改善できる、と思う。こういった点は、文法教育に LGSWE のフレームを利用することで一挙に変わるものではないが、すくなくとも今後の方向性について大変な示唆を与えらると思う。

4. 終わりにかえて

伝統文法からの LGSWE までの変遷を副詞分類の観点から眺めて、副詞を教えるときの文法教育について述べてきた。最後に、学校教育での文法教育のあり方について触れて終わりとしたい。

30 年程前までは高等学校には英文法を教える授業があった。現在では少なくとも公立の高等学校での英語教育課程には文法教育の特別な授業は設けられて

いない。文法学習として、通常の教科書の各単元の終わりに、申し訳なさそうに文法事項が付記されているにすぎない。こういった取り扱いの変化の現象面のみを見て、文法教育はいらない、とくにコミュニケーションを教える時代にはいないのだ、と考える教員すらいるようだ。

その昔なぜ英文法を独立して教えていたかと言えば、その時代の英語の学習目標が、書かれた英文を読むことにあったからである。書かれた英文を読む能力を養うには伝統文法を教えることがもっとも効率的である。その有効性は歴史的に証明されているといってもよい。だが、書いてある外国語を読むという目標から離れると、悲しいことに、伝統文法はその神通力を失ってしまう。言い換えると、伝統文法による文法教育は、そのままでは新しい時代の目標には合わないのである。だが、それはコミュニケーションを教える時代に文法教育がいらない、ということとは違う。

英語教育の目標が書かれた英語を理解する力の養成から英語を使ってコミュニケーションを図る力の養成という方向に変わったことと、学校教育における文法の授業が消えたことは、比較的同じ時期に並行的に進んだので、直接的な原因と結果に思われているかも知れない。だが、ここには直接的な因果関係はない。なぜなら、文法の授業が消えたことは、教育目標の変化が意図的になされた時期より先行しているからである。文法の特別な時間がなくなったのは、3 節で若干触れたが、文法の授業で教えられる文法知識は身に付かない、といった現状認識のためである。だから、文法の時間がなくなったことは、コミュニケーションの時代になったから文法は軽視していい、というメッセージに直接つながらない。ここは誤解してはならない。

文法の授業が消えたのは、文法の授業で教えられる文法事項が十分に身に付かなかったからである。そして、その理由は、文法を文脈から切り離して教えるようにしたから、と考えられた。だから、文法事項は通常の教科書を教えるときに教える、ということになったのである。文法の授業を独立して設けると、例えば、I lost my bag と I've lost my bag の形式と意味の対応の違いを理解させるために、文脈から切り取られた例文を多く提示して、過去形文には、過去のある時点が隠れている、現在完了形の文には、現在を含む時間表現が隠れて

いるといった説明を行う。しかし、そういった説明で理解することができる生徒は、相当程度抽象的な思考に慣れた生徒である。文脈から切り離して文法を理解できるのは抽象的な思考の産物なのである¹⁸。抽象的であるために、それを頭で理解できた生徒でも、文脈から切り離されているので、知識としてのみとどまり、実際の場面で知識が生きないことになる。結局、文法を独立して教えても、文法問題としては解けるが、実際には使えない。だから、文脈から切り離して文法を教える「文法の時間」がなくなり、その代わり文法事項は通常の教科書の各単元の中へと「戻って」来たのである。だから、本来は、通常の教科書を教えるときに文法を軽視せずに、むしろ積極的に教えるべきだとするのがふつうの流れである。現状では、普通の教科書には申し訳程度の記述でしかなく、適切な文法教育が提示されていないことこそが問題であろう。

外国語教師は外国語の習得には文法知識が必要であると肌で感じている。そして、自分が教わったような文法知識を生徒と共有することが英語学習を成功させる道であると信じて、自分が教わったことを教えようとする。一方、それを研究授業で参観する英語教育の指導的立場の者は、「教育目標に応じた適切な文法教育を行うように」、と助言せず、「文法の授業はないのだから文法を授業で取り上げてはならない」、といった否定的な態度をとる。真面目な教員は、心の中で文法は必要であると思いつつ、助言者の言葉を信じて、文法ではなくコミュニケーションを教えるのだ、と肝に銘じて、文法教育を欠いたコミュニケーション活動などを積極的に取り入れる。他方、批判的な教員は、自分の肌で感じることを信じて、そのような助言者を教育行政寄りの発言と一蹴して、旧来の考えで自分の教わった文法の教育を（密かに）おこなう。これは共に不幸なことであろう。

繰り返すが、文法教育を「文脈から切り離す」のではなく、文法教育を「文脈に戻す」ことが必要であったから、文法学習のための授業が消えたのである。文法教育がいらない、とされたわけではない。そして、コミュニケーション能力の養成を教育目標に掲げる時代では、コミュニケーションが本質的に場面内的能力であるから、話し手と聞き手が存在する場面を抜きにしては教えられるはずはない。ということは、文法教育が、文脈（＝「実際の場面」）に戻され

ておこなわれることを前提として、かつて以上に求められる時代であるといえるだろう。

References

- Biber et al. (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*, Longman.
- Halliday, M.A.K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar (2nd ed.)*, Edward Arnold, London.
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』、大修館書店
- Quirk et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman.
- 八木林太郎 (1959) 『副詞・接続詞・間投詞』第 17 巻、研究社英文法シリーズ第三集所収、研究社

¹ただ、屈折を持つ言語では、他の主要品詞(名詞、動詞、形容詞)と異なり、副詞は屈折形を持たない。Jespersen が接続詞、前置詞、副詞を一括して不変化詞(particle)としているのは故がある。

²⁵文型論は、言語学的にみれば、動詞の分類論に近い。基本的な動詞用法を選んで、英語学習者に提示することは決して誤っていない。しかし、「すべての英語の文は 5 つの文型に集約される…」などといった説明を行うことは誤解を生むもとである。

³正確に言えば、副詞表現は、同シリーズの各所で取り扱われており、例えば、第 20 巻『文(上)』の VI の副詞節、第 21 巻『文(下)』の V で、文修飾の副詞、第 22 巻『句と節』の V で副詞句・副詞節について取り扱っている。また、第 23 巻『語順』41-47 で副詞の現れる位置について取り扱われている。全体で拡散的な取り扱いがなされていることは、副詞は品詞論上の取り扱いは軽いが、言語を構成する上では避けては通れない重要な表現類であることを示している。

⁴「修飾」を modification とすれば、少なくとも該当の副詞は文を modify してはいない。八木(1959)には、文修飾副詞の特徴として、文修飾副詞は付加的なもので強い強勢がない、というが、これは一般的な事実ではない。また、文修飾副詞の意味の多くは節を以て書きかえることができる、として、*Luckily no one was hurt=It was a lucky circumstance that no one was hurt* のような例を挙げている。この関係は修飾とはいえない。

⁵この区別により、形容詞を修飾する副詞は *adverbials* ではなく、*modifiers* になる。例

えば、(a)と(b)に同じ語の really が現れているが、その働きは、(a)では modifier であり、(b)では adverbial である、ということになる。

(i) a. She is a really beautiful woman.

b. She is really a beautiful woman.

really は、尺度をもっている言語単位に結びついて、その尺度で高いところにあることを意味する。(a)では、形容詞 beautiful が尺度を持っているし、(b)では話し手の she is a beautiful woman という命題への確信の度合いに尺度がある。

⁶CGEL が Subject(S)、Verb(V)、Object(O)、Complement(C)などの略号と平行して、節内で副詞的な働きをしている表現をまとめて A と読んでいるのは、そのためである。

⁷この操作的区分法にも問題がないわけではない。CGEL では次の要件をあげている。

(i)分裂文の焦点の位置に現れる。

(ii)選択疑問文あるいは not...but で対比される。

(iii)focusing subjunct で焦点を受ける。

(iv)述語省略や pro-form のスコープにはいる。

(v)疑問詞で抽出できる。

(CGEL, p.504)

(iv)の要件は、subjunct と区別する要件を subjunct に依存して決めていることになり問題があるだろう。また、(v)の要件も what, who, where, why, how などはいいが、疑問詞で抽出できることを文字通りでとれば、how much や to what extent も許されるはずである。すると、degree になり、CGEL の定義では disjunct に入る。CGEL でも触れられているように、adjunct と subjunct との間の neat division は希で、段階的な違いがあるに過ぎない。(CGEL, p.505 の note 参照)

⁸CGEL での用語は過去の言語学からの流用で、着想を知る上で興味深い。

adjunct/subjunct は Jespersen の三階説(three rank theory)の用語である。彼の理論では、語の結合には、a beautiful flower のような junction と The boy runs のような nexus の二つがある。名詞を一次語として、それを限定する語を adjunct、二次語である adjunct をさらに限定する語を subjunct と呼んだ。なお、disjunct の語は CGEL で初めて副詞分類に使われたが、従来 or のような接続詞を disjunctive と呼ぶことはあった。

⁹伝統文法の品詞論では語というすべての部品のカテゴリー分けが必要なので、yes/no なども分類すると文副詞とされた。CGEL ではこのような語彙を副詞分類とはせずに、質問への response word としてのみ記述する。構造的でないからである。この区別があった方が、副詞分類への混乱が少ないであろう。

¹⁰CGEL には、”...subjuncts...which have a reinforcing effect on the truth value of the clause or part of the clause to which they apply.”とある。(CGEL, p. 583)

truth value を文字通りの意味で解釈すれば、the clause or part of the clause と選択等位ではない。なぜなら節の「一部」に真理値は存在しないからである。すると、節の一部に働く reinforcing effect が具体的に何を意味するのかははっきりしない。

¹¹ CGEL は、personally の用法をあげて、三区分別に対応させている。(CGEL, p. 618)

(i) a. He signed the document personally.

- b. I personally have never been to New York.
c. Personally, I found the music too arid.

(a)は署名を行う行為に対して「個人の資格で…」、「自分で直接的に」という限定をつける意味で、personally は動詞句へ付接的に付加していると見なされる。(b)では、主語 I に選択的に反応しており、下接的に付加していると見なされ、下接詞の intensifier である、という。一方、(c)は、「個人としての意見として言えば…」という意味で、「その音楽は退屈すぎた」という命題全体に離接的に付加している。つまり、style-離接詞である。(a)と(c)ははっきり区別できる。しかし、(b)は独立して区別することは可能であるにしても一般性がなく、せいぜい[主語+ personally]のセツフレーズ的である。(a)の重種としてもよいであろう。

¹²頻度の副詞(always, usually など)は、頻度が文全体の出来事の頻度なので、それゆえ③の位置が標準的になる。

¹³本稿では、強調詞(emphasizer)は、(CGEL の言い方では)離接的なものであるか、命題への強意的なもの、と考えるので、部分否定になるのは、強意的なもの、部分否定にならない、否定の領域に入らないものを離接的なものと分けられる。しかし、CGEL のように emphasizer を設けると、否定の領域に入るもの (really) と否定領域に入らないもの (certainly, perhaps) を一つのグループに入れることになる。

¹⁴(15)では、「100%否定した」とすれば両者は限りなく近くなるだろう。しかし、CGEL の説明を文字通り解釈すれば、(15a)は「限りなく 100%に近く」という意味で、強意詞ということだろう。

¹⁵もう一つ大きな点は、コーパスの分析から spoken language と written language との間の言語使用の違いを明らかにしていることであろう。これは spoken language には、written language とは異なる文法があるのでは、という認識につながっている。この認識が生まれたことも特筆すべきことである。

¹⁶正確にはこの両者は一致しない。CGEL では、compromiser は動詞の適切性について効果を下げる働きを持つとされているが、imprecision はいわゆる hedge 表現である。

¹⁷LGSWE の三分類は、テキスト分析での機能上の主要な分類と同期している。例えば、機能言語学者 Halliday (1994)は、言語分析の中核的な構成として、情報の伝達に関わる ideational な機能、話し手から聞き手への情報伝達の際に加わる心的態度に関わる interpersonal な機能、そして、テキスト全体の cohesion に関する textual な機能の三つをあげている。これはそれぞれ LGSWE の三分類に対応している。

¹⁸つまり、文法の授業が消えたのは高校教育の大衆化も大きな原因である。抽象的な思考に耐えない生徒に対して、文脈から切り離された思考を求める文法を学ばせることはできない、といった点にある。